

広がる可能性、広がる未来

私たちの住む町には様々な可能性があり、その可能性は未来へと続く力を持っています。
今、町内で力強く活動を続けるみなさんにお話を聞きました。



誰かを喜ばせたいという想いへ

自分たちだけの喜びから

きらく
喜楽会

上段：左から五十嵐文男さん、神田保さん、菅野延秋さん、佐藤輝彦さん、佐久間恒司さん
下段：左から菅野常治さん、清野賢一さん、佐々木勝弘さん このほか佐藤武二さん、佐々木良美さんが会員



子どもの頃からの友達で結成
小綱木地区の同世代で「退職を機に自分たちが『喜び』『楽しめる』ことをしよう」と平成24年に結成されたのが「喜楽会」です。最初は国内外へ旅行に行くことが主な活動でしたが、徐々に「地域に貢献したい」と思う気持ちが強くなり、当時、自治会で進められていた「花と清流の里づくりプロジェクト」に加わり、ざる菊や長滝川の整備などを行っていました。令和4年には会員の10名が現職時代に培った技を生かし、町内外から多くの人が利用する湧き水「天恵泉」周辺の水飲み場の設計や木造の案内板の製作などを行うなど活動の幅を広げました。

子どもたちのために残す
「天恵泉」の整備後、家族連れのみなさんが楽しそうに「天恵泉」を利用する姿を見て、「ここに子どもたちが喜ぶような場所を作ってみてはどうか」そんな声が出るようになりました。そこで幼少期、自分たちが見ていた夏にホタルが飛び交うような場所をつくることを目標にビオトープづくりが始まりました。最近では小綱木地区外からもボランティアとして、ともに活動してくれる方も増えており、地域交流の場として地域活性化に一役買えるのではないかと思います。また、昨年から川俣高校の生徒さんたちにも参加していただいております。若い世代にも川俣町の自然の豊かさに触れ合うことの楽しさなどを伝えて、さらに次の世代へと繋いでいってほしいと思います。

納豆づくりの始まり

もともとは、山木屋地区にあったカミノ製作所の自動車部品部門で働いていました。たまにサポートで納豆部門に入ることもあり、その時から「納豆づくりは面白い」そう思っていました。

しかし、震災により山木屋地区から避難を余儀なくされ、納豆製造は停止。避難指示解除とともに再開したものの4年後に従業員の高齢化などを理由に撤退してしまいました。

オール山木屋産の納豆を

離れていた納豆製造ですが、納豆部門を引き継いだ別会社からお話をいただき、戻ってきたものの再度撤退に。長年納豆製造に携わり「この納豆は地域の人のために無くしてはいけない」そう強く思い事業継承を決意しました。先代社長の「福島を応援」という想いを引き継ぎ、県内の大豆を使用し納豆を製造しています。いつか山木屋地区産の大豆で納豆を製造し、オール山木屋産の納豆で、この地域に活気を取り戻したいです。

この町からこの納豆だけは
無くしてはいけないと思って



山乃屋 影山 一也さん
かずや



デザイナー 木次 遥さん はるか

川俣シルクと植物で

新しい価値を生み出す



天然由来の組み合わせ

大学卒業後、勤めていた仕事関係で「川俣シルク」の存在を知り、その後、通い直した服飾の専門学校で「植物染色」に出会いました。

シルクは動物繊維でタンパク質が多く含まれているため、他の繊維に比べて「植物染色」との相性が良く、いずれも天然由来であるという最近のトレンドを併せ持っています。また、天然由来の2つの組み合わせは、私のように敏感肌の人でも問題なく身に着けることができる魅力的な生地が出来ます。

川俣シルクの新しい価値を

川俣シルクは、今まで生地として取引が多かったと思うのですが、川俣シルクを「川俣で採れた植物で染める」ことで新しい価値を生み出せるのではないかと考えています。現在、染色で使用する植物は、町内の造園会社など地域のみなさんからお譲りいただくこともあり、町の人とともに1つのものを作り上げることができて楽しいです。今後、川俣シルクのブランドを立ち上げ、川俣シルクの魅力をファッションの舞台で国内外に向け発信していきたいです。

